

第 6 回総合計画審議会等における委員からの修正意見

目次

本文案（目次）	委員からの修正意見等
序 文	・ 非常に重要なキーワードである「居場所と出番」、「学藝」といった言葉が目次にない。目次に登場しても良いのでは（濱崎委員）
第一章 長期ビジョン（仮称）策定の背景	
第一節 世界文化自由都市宣言―世界史を担うまち	
第二節 京都市基本構想―21 世紀の到来を見据えて	
第三節 長期ビジョン（仮称）の策定―「都市の理想」に立ち返って	
第二章 京都市のかたち	
第一節 悠久の自然との共存の中で	
第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり	
第三節 矜持と節度のもとでひらかれたまち柄	
第三章 世界及び日本の動きと京都市のいま	
第一節 世界及び日本の動き	
第二節 京都市のいま	
第四章 わたしたち京都市民がめざすまち	・ 「結び」というタイトルがもったいないと感じた。全体のまとめのような印象を受けるので、読まれない可能性があるのではないか。「皆さんに聞きたい」のような表現のほうが人々に読まれるのではないだろうか（田中委員）
第一節 自然への畏敬と感謝を抱けるまち	
(1) 謙虚さのもとで自然と関わり続ける	
(2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る	
第二節 歴史と文化を介して人間性を回復できるまち	
(1) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける	
(2) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける	
(3) 支え合いの中で日々の生活を営める	
第三節 自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち	
(1) 多層的でゆるやかなつながりが続く	
(2) 「夢中」と「感動」に溢れ、学び続けられる	
(3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える	
第五章 わたしたち京都市民のこれから	
<u>結び</u>	

序文

本文案（序文）	委員からの修正意見等
わたしたち京都市民は、京都市が、 わたしたちと世界中のあらゆる人々にとって、 <u>歴史と文化を介して人間性を恢復できるまち、</u> <u>自然への畏敬と感謝を抱けるまち、そして、</u> <u>自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち</u>であり続けるために、 不断の努力を重ねていく。 人間は、過去に生かされ、未来を生きている。 京都市は、その成立から 1200 年以上の歳月を経て、人類の文明においても稀有な歴史都市・文化都市として世界中の人々から敬愛されるに至った。しかしながら、今日に至るまでには、有名・無名を問わない無数の先人たちの献身があったことを忘れてはならない。このまちを重層的に彩る各時代の史跡も、人間の極致を体現してきた工芸や芸道も、歴史の偉大な産物であるのみならず、市井の人々の愛着と創意とに支えられて残存してきた。 わたしたち京都市民は、幸運にも近年の戦禍を免れてきたこれらの人間的遺産の享受者であると同時に、これらの継承者でもある。この系譜に在ることの意義と幸福を噛み締めながら、節度と矜持のもと、先人たちの営為の結晶を未来に伝え遺していく責任を果たしていきたい。 人間は、自然に生かされ、自然を生きている。 京都市は、信仰から美意識に至るまでのさまざまな思想を、豊かな自然との関係の中で醸成してきた。悠久を体現する山々に囲まれ、清らかな水の恵みに満ち溢れたこのまちは、自然と人間の原義的な不可分性や一体性を思想的土壌とし、食文化や農業はもちろん、服飾、建造物、そして町並みまでもがこの水脈と土壌とに根差している。 わたしたち京都市民は、自然を人間から切り離し客体化してきた過去数世紀を省み、新たな可能性として、このまちが育んできた自然観—ゆえに、これと不可分な人間観—を世界に	・ 序文に 3 つのテーマがあり、1 つ目が「歴史と文化を介して人間性を恢復できるまち」、2 つ目が「自然への畏敬と感謝を抱けるまち」、3 つ目が「自他の生を共に肯定し尊重し合えるまち」である。この <u>3 つのテーマの順序で記載されているが、本文案では若干順序が入れ替わっている</u> 点が気になった（阪部委員） ・ <u>誰に届けているのかの言及が序文にもあって良い</u>。可変して良い、自分たちの言葉にして良いフレキシブルさがあっても良い（杉田委員） ・ <u>「恢復」という漢字はまず読めない</u>。本文は品格を保ちつつ、分かりやすいものを別途作成するなどの工夫が必要ではないか。（堀場委員）

提示していくとともに、他の文化圏・思想圏との響創のもと、人間と、人間の営為たる科学や経済、そして自然が、真に共存する未来に貢献していきたい。

人間は、共同体に生かされ、共同体を生きている。

京都市は、短期的・個別的な利益追求が偏重される時勢においてなお、長期的な共栄を希求しながら、今日においては非合理・非効率と評され得るさまざまな人間的つながりを保全してきた。このまちには、地縁や職業のみならず、学事、祭事、稽古事、ひいては名も無きかかわりでつながる彩り豊かな共同体が今も数多く息づいている。複雑で、繊細で、それゆえに愛おしくてたまらない生身の人間関係こそが、数多のつらなりとかさなりを宿すこのまちを織り成してきた。

わたしたち京都市民は、来る四半世紀の間に、国内外の人口動態の変化、言語の壁の融解、さらには、これらに伴う経済構造や社会規範の変容の中で、地域社会のみならず国際社会の一員として、数多のつながりを紡いでいくこととなる。世界中の人々と生み出すこのまちの新たなひろがりにおいて、わたしたちの日常を包んできたあたたかな息遣いのもと、互いの歴史、文化、自然、そして人の在り方をともに尊重していきながら、京都市と人類社会の双方の恒久の平和と共栄を実現していきたい。

第一章 意見なし

第二章

本文案（第二章）	委員からの修正意見等
第二章 京都市のかたち 第一節 悠久の自然との共存の中で このまちの歴史は 794 年の平安京の成立以前にまで遡るが、自治体としての京都市は 1889 年の市町村制度施行によって誕生した。以降、幾度もの行政区の分合を重ねながら、2005 年に 1200 年前の平安京造営の木材供給も担った旧・京北町との合併を経て、現在の市域となった。 このまちを生きた先人たちは、悠久を体現する京都三山（東山・北山・西山）を望みながら、鴨川・桂川・琵琶湖疏水をはじめとする豊かな水の恵みのもと、人間と自然を原義的に不可分な存在と捉える自然観を思想的土壌として育んできた。玄関や床の間に融け込む草花、日々の食卓に並ぶ和食や和菓子、まちの景観の一端をも担う花かんざしといったさまざまな生活様式や文化様式が、この自然観を宿しながら今日の京都市にまで根付いており、わたしたち京都市民と京都市にかかわる人々の生に彩りを与えている。 過去数世紀の間、人類社会は、人間と自然を近代的・二元論的に切り分けて捉えた上で、<u>自然を支配の対象としてきた</u>。この態度への反作用と反省もあって、20 世紀後半には「共生」、21 世紀前半には「持続可能な開発」といったことが提唱されるに至った。しかしながら、この地を生きた先人たちは、これらの言葉が社会的に流行する遥か以前から、人間と自然の不可分性の中で共存を志向し、これを生活と文化において体現してきたのである。この自然観は、改めて世界に提示していくに値するだろう。 第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり このまちは日本史の主要な一角を担ってきたが、その軌跡は決して単一的・直線的なものではなかった。朝廷・幕府といった政治体制、神道・仏教・儒教をはじめとする宗教思想、これらと連関した経済活動などが複雑に絡み合う中で、戦乱等の危機を経てなお文化の力で	・ 「自然を支配の対象にしてきた。でも京都は支配の対象にしていなくて、自然との共生を体現できている」といった表現がある。確かにそうではあるが、<u>京都でも体現できていない部分はかなりある</u>。うまくいかなかった部分も多々ある中で、<u>もう少し丁寧な表現ができる</u><u>と良いのではないか</u>（貫名委員）

再建を重ねながら、多層的かつ多元的に織り成されてきた長い歴史の現在地が、わたしたちの京都市である。

このような歴史の重なりの中で成立してきた芸道や武道、工芸といった文化様式の根底には、人間が到達し得る極致への志向を見出すことができる。身体と心、自己と他者、人間と自然を本来的に不可分と捉えるその精神性は、茶道や華道、能や武道、果てはこれらの道具や建築などを經由し、さまざまな生活様式においても体现されてきた。また、これらの文化は、今日まで名が伝わる名人や職人のみならず、名も無き担い手の創意や市井の人々の愛着と主体的な努力に依って受け継がれてきたことを忘れてはならない。

こうして育まれてきた歴史と文化の重なりと奥ゆきは、長きにわたり、新たな人間関係の端緒や基盤となり、また、この人間関係こそが新たな歴史と文化を創発してきた。京都市の歴史と文化の重なりと奥ゆきは、今日においては軽視されつつある生身のひとの連なりを織り成すとともに、わたしたち京都市民の日常を、過去や未来と不可分なものとして繋いでいる。現在を生きるわたしたち京都市民は、先人たちが紡いできたこのまちの歴史と文化の中を生きているのであり、また、これらを未来へと引き継いでいく責任の中を、同時代の人々とともに生きているのである。

第三節 矜持と節度のもとでひらかれたまち柄

このまちの歴史と文化は、それぞれの時代と分野とを生きる人々の矜持と節度によって支えられてきた。時流に翻弄されることなく、生涯を捧げて伝統の真髄の普及や保全に尽力してきた先人たちの矜持は、その作品のみならず景観にまで刻まれる、このまちの空気をつくってきた。また、この空気こそが、分野を超えた敬意と、自分の領分を安直に超えない節度とを、人々の内に育んできた。この矜持と節度に由来する絶妙な間合いとあわいは、今なお、表面的な言葉や短期的な経済合理性を超えた人間的信頼の基盤をこのまちに与えている。

このまちは、伝統を保全するのみならず、先駆や進取によってさまざまな文化や産業を創出してきたまちでもある。数々の芸道や工芸の発祥の地となったのみならず、現代においても精密機器や先端技術産業の国内主要拠点の一つを担っている。これらの基盤には、矜持と

- ・ 「節度と矜持」というキーワードがたくさん出てくる中で、第二章第三節「分野を超えた敬意と、自分の領分を安直に超えない節度」と記載がある。この箇所は定義をしているわけではないが、人によっては定義と受け取られる可能性があり、この表現で良いのかと思う（濱崎委員）

節度のもとでの闊達さに基づく、ひらかれたまち柄がある。時勢に安直に迎合することなく、それでいて分野や市域を超えて人々が交わりながら新たな創発を追求していく態度は、まさに守破離の体現と言えよう。

わたしたち京都市民の日々の暮らしもまた、この矜持と節度、そしてひらかれたまち柄の中で営まれている。商店街には個性豊かな専門店が立ち並び、横目に過ぎ去る、立ち止まって眺め入る、ひいては踏み入るといった自在な関わり方を見出せる。鴨川の河川敷では、銘々が、歩き、走り、座り、書を読み、水面を眺め、木々に触れ、地域猫を愛でるなど、人それぞれに過ごしている。こういった多彩な人々が互いに適度な距離を取りながら、微笑みを向け合い、ふとした拍子に言葉を交わし、果ては共通の友人を見つける。わたしたち京都市民は、このようなひらかれたまち柄の中で、自然の悠久、歴史の重なり、文化の奥ゆき、そしてひとの連なりを享受し継承している。表面的で即時的なつながりを促す時勢とは必ずしも軌を一にはしない矜持と節度、そしてひらかれたまち柄こそが、京都市を京都市たらしめているのである。

第三章

本文案（第三章）	委員からの修正意見等
第三章 世界及び日本の動きと京都市のいま 第一節 世界及び日本の動き 21 世紀最初の四半世紀において、世界人口はアジアとアフリカを中心に増加の一途を辿ってきた。しかしながら、国内人口は 2008 年をピークに減少局面に入り、2024 年現在は約 1.2 億人、2050 年代には 1 億人を下回る見込みである。すでに、内需の縮小、労働力の不足、社会保障費の増大などの影響が顕在化しつつあるとともに、海外からの人材流入も加速しており、外国籍の居住者も増加し続けている。 この四半世紀は、地球温暖化や大気汚染・海洋汚染をはじめとする国境を超えた環境問題が顕在化した時代でもあった。地球規模での対応に向けて国家の枠を超えた協力が志向されてきたが、政治・経済・宗教等の差異に由来する限界など、真の国際協調に向けた課題が顕在化している。日本においては、これらの環境問題に加えて、地震や台風などの自然災害が幾度と発生し、また、南海トラフ地震の発生確率も年々高まっている中で、高齢化・核家族化による地域社会の弱体化とも相まって、防災・減災対策の重要性が高まり続けている。 日常生活においては、デジタル化が急速に進展した。世界的なスマートフォンの普及によってコミュニケーションや情報収集が容易となり、生活利便性が向上した一方で、アテンション・エコノミーと呼ばれる人々の注意力を収奪して利益に転換する経済潮流が増長を見えており、<u>精神疾患の増加</u>、フェイクニュースの氾濫、プライバシー侵害といった問題も深刻化している。 日本経済は、20 世紀末からの不況が尾を引く中、2007 年の世界金融危機、2011 年の東日本大震災、2020 年からの新型コロナウイルス感染症の世界的流行、人口減少・少子高齢化や産業構造転換の遅滞などから、2025 年現在においては GDP で世界 4 位となった。デジタル化によって<u>雇用の流動性が高まり</u>、<u>転職・副業</u>の一般化や女性の社会進出が進展した一方で、所得格差の拡大や労働力不足が深刻化している。 2020 年からの新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は、身体的・物理的な活動が不可欠な多くの文化様式を存続の危機に追いやるとともに、日本を含む世界各国が経済的に甚	・ 「精神疾患＝統合失調症」と受け取られた時に、統合失調症の人たちに対するネガティブなイメージを助長することが少し心配である。<u>精神的な健康を害する人が増えてくる、あるいは、メンタルヘルスの悪化が増加するという</u>意味合いだと思うので、<u>「精神疾患」という用語以外で、そういった意味合いが分かるような言葉に置き換えられると良い</u>のではないかと（福富委員） ・ 「精神疾患の増加」という文言には引っ掛かった。<u>社会的文脈で捉えるべき問題を病理化するような見方には、違和感を持った</u>（藤野委員） ・ デジタル化が進展したこと自体は良いことだと思っている。しかし、<u>本当に因果関係が正しいかをデータから読み取るのは難しい</u>。そのため、「人々の生活利便性が向上した」くらい

大な打撃を被り、多くの事業者が閉業に追いやられた。この間、国際機関や国際的枠組みの限界、国家間の経済力・技術力・行政対応能力の格差、企業間の競争が随所で顕在化する結果となった。人類と感染症の闘いは有史以来続いているところ、世界そして日本全体においても平時からの対応体制構築が不可欠である。

環境問題や感染症の脅威に加え、紛争や戦争の悲惨が 21 世紀を迎えてもなお発生・持続しており、特に 2020 年代に入って国際社会の緊張感が一層増長している現状から目を背けてはならない。日本は、直接的には戦禍を免れているものの、経済安全保障の問題をはじめとしてあらゆる国家・地域が世界と不可分となった今日において、いまこそ国際社会の一員として平和の重要性を改めて訴えていく余地がある。

ESG（環境・社会・企業統治）を重視する投資、SDGs（持続可能な開発目標）、DEI（多様性・公正性・包括性）といった、世界全体で理想を共有し、企業等の具体的な実践にまで結実させようとする包括的な取組も進められてきたが、2025 年現在においてはこれらへの反発が顕在化しつつもある。しかしながら、日本は、世界各国からの信頼をもとに、これらの理想を掲げることの意義を世界に説いていく役割を担える可能性を有してもいる。

第二節 京都市のいま

京都市の人口は、2000 年以来、147 万人前後で推移してきたものの、2016 年から減少局面に突入した。とりわけ、就職や結婚・育児に伴う若年層の流出が顕著であり、産業の担い手の高齢化と後継者不足が深刻化しているとともに、地域における人間関係の弱体化に拍車をかけている。このまちが長い歴史の中で育んできた住民自治の伝統や支え合いの精神と実践の双方が年々希薄化していることに加え、各地域の歴史に根差した行事やこれらを彩る有形・無形の文化様式が消失の危機に瀕している。さらに、全国的な少子化に伴う京都市内の学生数の減少も予見され、日本有数の大学街である京都市の在り方も大きな変容を迫られていくだろう。

産業に目を向けると、製造業を中心とする大企業が世界市場においても重要な位置を堅持

の標記で留めておくのも良いかもしれない。また、「デジタル化によって雇用の流動性が高まり…」という箇所についても、デジタル化によって起こったわけではなく社会の流れではないかと感じる（田中委員）

- 「転職・副業」の表現について、転職と副業を中点でつなぐ表現はあまり使わない。転職と副業は別ものである。記載するとしたら「転職、副業・兼業」が望ましいのではないか（田中委員）

- 雇用の流動性といえばこれまでの日本では、女性等の非正規雇用増加による不安定雇用の拡大といったネガティブな側面と結びついて語られることが多かったと思うので、女性の社会進出の進展というポジティブな文脈で語られている点に引っ掛かった（藤野委員）

- 「2025 年現在においてはこれらへの反発が顕在化しつつもある」について。10 年くらいたった時にこれを見て「反発とは何だろう」とならないだろうか（鈴鹿委員）

- 2025 年現在においては、SDGs や DEI の反発が顕在化しつつあることは、現時点のことであるとともに、反発に対する、逆反発も一部で起こっており、このような単純な捉え方で良いのかにも違和感があつた（藤野委員）

- 特設サイト等に集まった意見結果についてなかなか言及されない。京都市の現状が書かれているが、そこに意見結果ももう少し盛り込まれると良いのでは。時代が変わっても同じようなことで悩んでいることもあれば、社会の変化を感じられるような、ハッとさせられる悩みや将来への希望もあると思う。長期ビジョンにも、今の時代の市民たちが何に希望を抱き、何に不満を感じているのかも、データとして盛り込むと良さそうだ（杉田委員）

する一方で、これらを支える中小企業を担う労働者・後継者の不足が問題となっており、また、特に観光業や飲食業では市外からの参入も年々増加しており、地域密着型の事業者等が苦境に立たされてもいる。ベンチャー企業や新規事業の創出・拡大に向けた支援がさまざまに展開されてはいるものの、大学等での最先端の研究成果の事業化や文化と市場の適切な接続を担う経営人材が著しく不足している。グローバル化とデジタル化の流れの中で、地域の歴史と文化に根差した産業を維持発展させながら、未来を担う人材を確保し育成していく必要性が増している。

京都市を訪れる観光客は、過去四半世紀で2割以上増加し、2013年には5000万人を突破、COVID-19の流行によって減少を見たが、2023年に同水準に戻り、現在も増加を続けている。特に海外からの観光客が大幅に増加しており、宿泊業をはじめとする幅広い産業に好影響を与えている。一方で、特定の観光地への訪問客の集中、公共交通機関の混雑、幹線道路の渋滞、マナーの差に由来するトラブルなど、市民の日常生活への悪影響も生じている。京都市の歴史や文化が表面的に消費されていることへの反発も根強いが、海外観光客は今後とも増加が見込まれるところ、これらの深みや真髄を異なる文化圏の人々に伝えていく新たな工夫と努力が求められている。

気候変動は京都市においても具体的な影響として顕在化している。記録的な豪雨や猛暑日が増加しているのみならず、たとえば、祇園祭の厄除け粽や京料理の敷き笹に使われるチマキザサ、葵祭の装飾品の材料となるフタバアオイ、五山の送り火や清凉寺のお松明式に用いられるアカマツをはじめとする在来種が消失の危機に瀕している。

わたしたちの京都市においては、地域の人間関係、歴史と文化、産業、そして自然が、すべてつながっており、不可分なものである。わたしたち京都市民は、京都市の未来のために、現状と真摯に向き合い、国際社会の動向や技術革新も踏まえながら、これらの保全と継承という責任を果たすための工夫と努力を重ねていかなければならない。

・ 京都の昔からの産業は、実はインバウンドによって経済的にも打撃を受けている。新しい海外からの人の目を引くようなところに行かれ、従来のところに来られない方が増え、売上が下がっている話ばかり聞く。そのため、観光業はこんなに潤っていたのか、という印象となるのは現実とは異なると思う（鈴鹿委員）

・ 植物とこれらの在来種が消失の危機に瀕しているとう記載は誤りではないか。これらが危機に瀕しているのは確かだが、気候変動が主な原因ではない状況であるため、このまま読むと気候変動によっていろいろな植物が消失の危機に瀕していることになる。この点は要修正ではないか。今現在の課題としては、自然との関係性、関わりの希薄化のようところが主になってくる（貫名委員）

第四章

本文案（第四章）	委員からの修正意見等
第四章 わたしたち京都市民がめざすまち 京都市は、先人たちの尽力あって、歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なりを宿す<u>学藝に満ち溢れたまち</u>として世界に知られるに至った。<u>学問や藝術、そしてこれらに限定されない様々な人間的営為</u>において、真理の探究や伝統の継承・創造に挑む人々の生き様は、その土壌となった豊かな自然と併せて、京都市内のみならず世界中の人々から深く敬愛されている。わたしたちの京都市は、これらの人々の夢中や献身と世界中の人々の敬意と愛着とが出会い、新たな人間関係をも育みながら人類社会の新たな地平を拓いてきた、世界有数の<u>学藝の府</u>である。 わたしたち京都市民は、このまちのいたるところに根付く学藝のもとで市域ひいては時代をも超えてつながる数多くの人々、いわば<u>京都学藝衆とともに、世界文化自由都市という理想の体現を通して、人類社会の未来に貢献していく</u>。この際、近代以降の合理主義の加速化が、自然を支配の対象と捉え、環境を破壊し、人間性を収奪し、さまざまな社会的分断を生み出してきたことをともに省み、自然への畏敬と感謝を抱けるまち、歴史と文化を介して人間性を回復できるまち、自他の生をともに肯定し尊重し合えるまちを、世界へと提示していく。	- 冒頭の書き出しが唐突ではないかというのが、私も唯一気になった点。「<u>学藝のまちである</u>」、「<u>学生がたくさんいるまちである</u>」という話は、<u>第四章の冒頭よりは、何か節を設けて別の話として入れても良いのではないか。芸能や伝統のようなものが、全般的に過去の遺産、先人の遺産として、京都においては非常に大事であると思っているものの、少し強調され過ぎているように思う</u>。イノベーションや新しいテクノロジーの開発も重要ではないか。テクノロジーは脅威であるだけでなく、私たち自身がこの環境の問題や、京都が先進的な都市として発信していく場所でもあると思う。そういった意味で、学生たちがたくさん集まっているという京都の特色を、第四章の別の項目として入れても良いのではないかと思った。<u>冒頭が各節をすべて総合しているか疑問である</u>（小川委員） - 茶道など「<u>道</u>」が付くものは、<u>根本的に「藝」ではないと思っている</u>。芸術やアーティストではない、でも学でもなく、<u>文化というくくりでしか見たことがなかった</u>ので、違和感があるのだと思う。そこに芸術家の方が入るのは分かるが、そこに文化が入るのがピンと来なかった（鈴鹿委員） 「<u>学藝</u>」という言葉は<u>逆に大事だと思っている。ただ、今回の記述においてはものすごく唐突だと思ったので、工夫は必要だと思った</u>。今、普段私たちが想像する学問や藝術は、ここ150年くらいの概念でしかないことが多い。<u>学びというものはもっと幅広いものであり、まち全体から学んでいただろうし、芸能からも学んでいただろう。近代以前は、藝という言葉はとても幅広く使われていたと思う</u>。近代の教育もそうであるし、学問もそうであるし、産業もそうかもしれないが、京都の持つ、あるいは日本の持つ、曖昧なところもあるが非常に懐の深い、文化や藝術、学問のようなものを大事にしてきたという点が重要（濱崎委員）
	（裏面あり）

	・ 学藝や文化を語る時に、けん引するような人がいるというのが今までの印象で、どの審議会でも同じ人が委員になっている、どの講演会でも同じ人が講演しているなど、人にスポットが当たってきたのがこれまでだと思う。しかし、<u>今後も人にスポットを当て続けられるかどうかは疑問。人ではなくて場づくりのようなところにスポットを当てる</u>。実力も運のうたと最近言われている。京都を選ぶというのは後天的にできる。京都を選ぶことでチャンスを掴めることができる。そこで何か得られるということ（貫名委員） ・ もう少し具体性が必要なのではないかということだ。<u>第四章のボリュームがもう少しあってもいいのではないか</u>（曾我副会長）
--	---

第四章

本文案（第四章）	委員からの修正意見等
第一節 自然への畏敬と感謝を抱けるまち (1) 謙虚さのもとで自然と関わり続ける わたしたち京都市民は、季節の移ろいを目にすることで自然の美しさを、旬の食材を味わうことで自然の恵みを、地域の伝統や習わしに参加することで自然とのつながりを、折々に享受できる感性を、日々の暮らしとなりわいの中で互いに共有しながら、未来へと継承していく。生活の中に宿る自然との根源的な結びつきをしずかに深め、自然こそがわたしたちの生の源泉であることを再認識し、自然の中で生かされている命のひとつであるという謙虚さのもと、共存し続けていく。 このような自然観を希薄にしていく時流においては、自然との不可分性を改めて実感できる機会を日々の暮らしの中で創り出しながら、後世の京都市民のみならず、世界に向けてもこの自然観を伝え遺していく。 (2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る わたしたち京都市民は、このまちが 1000 年以上の歴史の中で培ってきたしなやかさを保持しながら、さまざまな危機に先んじて備え、対応し、立ち直ることができるまちをつくっていく。 このまちは、幾度もの戦乱を経験し、そしてその都度、復興を遂げてきた。このまちが 1000 年以上にわたり都市機能を遮断することなく存続し続けてこられたのは、先人たちの不屈の精神と知恵や工夫、そして、これらを体現し支えてきた文化の力に依る。また、過去四半世紀の間、わたしたち京都市民もまた、自然災害や感染症の脅威を経験し、立ち直ってきた。その土台には、このまちが歴史の中で育んできた重層的なひとのつながりがある。地域住民、地域団体、事業者、NPO といったさまざまな主体が、それぞれに備え、また、連携・協働し、防災・減災・復興に取り組んでいくとともに、このまちへの愛着と敬意とを、わたしたち京都市民はもとより国内外の人々までもが抱き続けられるよう、自然、歴史と文	

化、ひとの連なりを守り続けていく。

第二節 歴史と文化を介して人間性を恢復できるまち

(1) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける

わたしたち京都市民は、ひらかれたまち柄のもとで世界と文化交流を重ねながら、国際社会ひいては人類史をも豊かにする新たな文化を創造し続けていく。また、このまちの歴史と文化がこのまちの外部との交流によって織り成されてきたことを忘れることなく、グローバル化・デジタル化が進展していくこれからの時代においてこそ、世界中の国や地域から突き抜けた人材を集めるために工夫と努力を重ねていく。また、これらの人材がこのまちと交ざり合う中で生まれる新たな文化を積極的に受容しながら、京都市の多様性と包摂性をさらに高めていき、日本中・世界中の人々から活動の拠点として選ばれるまちにしていく。

(2) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける

わたしたち京都市民は、先人たちから受け継いできた先義後利・不易流行・利他の心といった思想のもと、短期的な利益にのみ囚われることなく、年月を賭して自らの技術と品質を熟達させながら、内外の人々とも積極的に連携・協働し、また、最先端技術を活用していくことで、世界に類を見ない独自の価値を創造し続けていく。この際、時勢に翻弄されることなく、このまちが醸成してきた矜持と節度のもと、本物（ほんまもん）を見極める感性を研ぎ澄まし続け、これを追究・創造し続けながら、後世と世界とに伝え遺していく。また、人間同士の信頼関係のもとで切磋琢磨し合うとともに、近隣都市とも協働しながら、本物（ほんまもん）のさまざまなかたちを学び、受け容れ、創り出し、まち全体の活力の源泉としていく。加えて、このまちで学藝を直接的に担う師や匠といった人々を介したつらなり、各地域の歴史や伝統に基づくかさなり、そして、これらの本物（ほんまもん）への愛着を通してその保全・継承の一端をともに担う市内外ひいては国外の人々とを結い合わせながら、教育や文化交流はもちろん、日々のなりわいの土壌としていく。

- ・ 対象者が、突き抜けた人材に特化されていると、厳選された人だけなのかと印象を受ける。ふらっと来られた旅人も留学生も文化に含まれるので、柔らかに包括的になれば良い（鈴鹿委員）
- ・ ほんまもんにはいずれはなれたら良いのだが、どちらかと言えば、京都が後押ししてきたのは新たな試みである。最初から本流を目指すのではなく、あえて新たなものを目指すことを尊重するところに京都らしさがあり、それが京都の価値。芸大もそのような現場。ほんまもんを強調されすぎると、少しそうではないなという印象を受ける。「ほんまもん」は大切だが、新たな価値の創造という点も強調しておきたい（赤松委員）
- ・ 経済の要素が直接的に表現されていない気がする。説明する時に、ここが経済だと言わないといけない。もう少し分かりやすく出した方が良いかもしれない（牧委員）

(3) 支え合いの中で日々の生活を営める

わたしたち京都市民は、支え合いを守りそして広げ続けていくことで、誰ひとり社会から取り残されることなく、安心のもとで健康で文化的な生活を営み続けられるまちであり続ける。

このまちは、普段から支援を担う人たちと、普段から支援を受ける人たちとが、場面や事情に応じて役割を循環させながら、互いに支え合って歴史と文化を紡いできた。ケアや配慮を提供することで自身も癒やされ、また、これらを享受する側となった際にも心からの感謝を胸に抱くことができる。地域の人々がともに子どもたちの登下校を見守り、子どもたちの声と笑顔が地域に活力を与える。こうした相互関係の中で、笑顔や感謝がまち全体にまで広がっていき、このまちの気質を育んできたのである。わたしたち京都市民は、このような人や社会とのつながりをそれぞれに担いながら、多層的な支え合いの中で、ともに自分らしくあり続けられるまちをつくっていく。

第三節 自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち

(1) 多層的でゆるやかなつながりが続く

わたしたち京都市民は、番組小学校や町内会といった形で先人によって培われてきた住民自治の伝統を継承しつつ、京都市にかかわるあらゆる人々と、趣味、習い事、商い、祭事などを介して、ゆるやかでひらかれたつながりを紡いでいく。この際、「洛中・洛外」、「心の御土居」をはじめとするさまざまな垣根を、矜持と節度のもとで、少しずつ取り払っていく。また、市外から通勤・通学する人々から観光客に至るまで、京都市とさまざまな関わり方をしている人たちもまた、わたしたちの京都市の現在を担ってくれていることに感謝と敬意を抱きながら、多彩なつながりを多層的に織り成していく。それぞれが望むかたちでかかわることができるまちをつくり、誰もが安心と愛着とを抱ける心地よいまちにしていく。

(2) 「夢中」と「感動」に溢れ、学び続けられる

わたしたち京都市民は、日々の生活の中に歴史と文化が息づき、多様な個性が受容されて

・ 福祉という言葉も出てこない。あえて福祉というのは入れなかったのかと思う。福祉の「福」という字は、神様からもらった宝物という字である。福祉というのもどこかに使ってもらえると嬉しい（高屋委員）

・ ケアを受ける側になったら感謝しなければいけないというようにも読めてしまう。ケアを受けた結果、感謝をするのはそのとおりだと思う。ケアを受けたり支援を受けている側も、自分たちの力で今度は何かを返したりというようなことも含めて、「強い人がもしかしたら弱いかもしれないし、弱い人がもしかしたら強いかもしれない」というニュアンスになるほうが良いのではないか（福富委員）

きたこのまちで、生涯を通して学びたいこと、体得したいこと、夢中になれることを見つけ
ていく中で、ともに感性を深めていく。また、人生とまちに対するこのような姿勢を互いに
尊重し合い、これをまちの空気としていくことで、市外ひいては国外からも人が集い、夢中
が溢れていくまちをつくっていく。特に、京都市の未来を担う子どもたちが、このまちの自
然や歴史と文化に触れながら豊かで鋭敏な感性を育み、個性に応じてさまざまな物事を追求
できるまちであり続ける。また、大学や博物館、文化財や史跡、伝統産業から先端産業まで
もが広く集積することを活かして、まち全体をキャンパスと捉えてこれらを有機的につなぎ
合わせながら、年齢、性別、国籍、文化圏などを超えてともに学び合える、夢中と感動に溢
れた人生とまちを織り成していく。

(3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える

わたしたち京都市民は、出自や生い立ち、年齢、性別、国籍、性自認や性的指向、宗教や
信条、身体的・精神的特徴の有無や程度にかかわらず、すべてのひとが個性を発揮でき、互
いを認め合いながら、自分の居場所と出番を見つけて日々を享受できるまちをつくっていく。
この際、国内最初の人権宣言を採択した全国水平社の設立や、障害児教育と福祉事業の全国
的な先駆けとなった京都ライトハウス創設をはじめ、京都市の先人たちが実践してきた人権
尊重の精神性と先進的な取組とを継承していく。あらゆる個性を互いに受容し、互いを思い
やり理解しようとする心を育み、安心・安全のもとで住みたい場所に住むことができる、ま
た、だれもが等しく就労の機会を得られ、それぞれが望む生き方や暮らし方を実現できるま
ちにしていく。

- ・ 現在こんなに孤立や孤独に悩んで、誰からも疎遠になる。事件を起こすに至る精神性は、
今のひとつの特徴。京都はそうさせないまち、そういう人々がそうならないようにセーフテ
ィネットワークが開かれているまちということだと思うが、今の世の中の変わり様や事件の
スピードを見ていると、全部言わないという京都的であるべきだが、もう少しお節介さが伝
わる、これからの子どもたちに、そっとしておく、お互いを尊重することは誰かを阻害して
いることだと分かってもらう必要がある（赤松委員）
- ・ 障害児教育について、進んでいるとの記載は引っ掛かる。日本は世界に後れをとっている
ことは事実（赤松委員）
- ・ 今はインクルージョンという概念で、誰もが同じ学校、教育で、障害の有無にかかわらず
必要な支援を受けて教育を受けることを意味している。ライトハウスの表現にしても、もう
少し広い意味だったと思う。障害児教育と限定してしまわずに、それぞれ言葉の意味などは、
今、広く捉えているところは、広くするようにしたほうがいいかと思う（安保副会長）

第五章

本文案（第五章）	委員からの修正意見等
第五章 わたしたち京都市民のこれから わたしたち京都市民がめざすまちのすがたは、狭義の市民、行政、市会がそれぞれの役割を果たしながら、ともに真摯に議論を重ね、この議論を日々の活動に反映し、そしてまた活動の経過や帰結を議論に反映していくという、不断の循環の中で実現されていくものである。 <u>市政の主体は、市長や市会議員を選出する、市内に居住する狭義の市民が担ってきた。</u> 市長は、市民の想いをもとに市政の方針を示し、行政がこれを実行してきた。 市会は、市民の代表として、市民の声や活動を行政に伝えていくとともに、市長とともに市政の両輪の一つとしての役割を果たしてきた。 しかしながら、京都市は、市内に居住する狭義の京都市民によってのみつくられているわけではない。わたしたちの京都市においては、働き、学び、憩うために市外から日々足を運ぶ人々、進学・就職・育児等による転居後も京都市に深い愛着を抱いている人々、かつて観光で訪れた経験のある人々、訪れたことはなくとも京都市に対して憧憬や敬意を抱いてくれている人々など、さまざまな関わり方を見出すことができる。学藝の府たるわたしたちの京都市が、狭義の市民のみならず、これらの人々の想いや献身のもとで存立していることを、忘れてはならない。 <u>わたしたち京都市民がめざすまちのすがたを実現していくためには、従来の狭義の市民の枠組みに囚われることなく、人生や日常のほんの僅かな一部であっても京都市の現在と未来をともにつくってくれるこれらの人々、いわば広義の京都市民と、積極的に協働していくこと、言い換えれば、多義的な市民性を促進していくことが不可欠である。また、この際、これらの広義の京都市民たり得る人々が銘々において自在に京都市にかかわることができる設計や、多層的で多彩な帰属意識の醸成・可視化を可能とする取組が求められる。</u> 日本全体で人口減少と少子高齢化が続く見込みの中、今後の京都市においても、行政職員数や予算の制約、地縁の希薄化、家族・親族間の扶助の縮小など、公・共・私のそれぞれにおいてまちを支える機能が低下していくことが予見される。一方で、これまでの京都市にお	・ 理念を掲げた以上、それを具体化するための知恵を絞らないといけない。「市長が市民のしもべ」という表現は極端だが、みんなの力で市長を支えるという、<u>わたしたち京都市民という役割を果たすことをもう少し盛り込んでもいいのでは</u>（宗田会長） ・ 基本構想策定の義務がなくなり、自治体に委ねられるようになったが、京都は基本構想に重点を置き、その後の具体化の部分に分けていくという形をとることを問い掛ける意味はもちろんある。それであれば、<u>なおさらどのように具体化していくかという道筋が入ってこなければ、第五章が宙に浮いてしまうことが危惧される</u>。だから、そこをつなぐ部分とセットにしつつ、まち柄をもう少し詳しく描いているようなものを作り出していくのが望ましいのではないか（曾我副会長）

いては、公・共・私のあわいを主体的かつ献身的に支える町内会、市政協力委員、NPO や有志団体、個別の名称を有さない集いやつながり、そして、これらの団体・活動間の連携や協働こそがまちを重層的に支えてきた。人的資源や行政機能が徐々に縮小していく未来においては、この縮小によって新たに生じる余白において、新たな団体や活動の組成を積極的に促すことはもちろん、これらと既存の取組を有機的に接続していくことが必要となる。

このような姿勢は、節度と矜持のもとで世代や公私の別をゆるやかに超えてきた京都市のまち柄と通底するものにほかならない。行政は、公務への責任感と誇りを強く保持しつつ、公・共・私の垣根を可能な限り低くすることに加えて、このまちで日々の生活を営む居住者たる狭義の京都市民と、それぞれの関わり方の濃淡を有する広義の京都市民とをつなげ、ともに京都市のまちづくりを担っていけるような設計に尽力していく。また、この過程において、あらゆる主体が「居場所」と「出番」を見出し、ひいては、これらを新たにつくり出し、いけるよう協働していくことで、京都市の次の 1000 年の歴史の基盤を構築していく。

結び

世界文化自由都市宣言にもあるように、理想の宣言はやさしく、その実行はむずかしい。しかしながら、このまちは、数多の困難や苦難を乗り越えながら 1000 年以上にわたる時を経て、今日のわたしたちの京都市にまでこのまちの自然・歴史・文化・まち柄を継承してきた。

わたしたち京都市民もまた、現在そして未来において、数多の課題と向き合っていくこととなる。利便性や快適性を追求する技術革新が人間同士の生身のつながりを収奪していく中で、両者の均衡をどう見定め、どう実現していくのか。京都市を訪れる観光客が急増を続けていく中で、日々の生活をおくる市民への影響にどう対応していくのか。少子高齢化をはじめとする社会的要因で支援・ケアを必要とする人が増え続けていくにもかかわらず、これらの支援・ケアを担う人材が減少していく中で、誰ひとり取り残さないまちをどう築いていくのか。わたしたち京都市民の日々の営みは、このまちの歴史と文化を体現し継承していくという責任を果たしているか。政策や市民活動が、直近の時勢や眼前の課題にのみ囚われたものでなく、このまちが醸成し保全してきた価値観に立脚できているか。わたしたちの京都市が、このまちの 1000 年の歴史に対して、ひいては、これから 1000 年先の未来においても、

胸を張れるものであるか。

本長期ビジョン（仮称）は、このまちが 1000 年以上もの歴史の中で醸成してきた価値観を確認した上で、世界と日本、そして京都市の現状を踏まえて、これからのまちづくりの在り方を展望したものである。しかしながら、本長期ビジョン（仮称）は、あくまで、京都市そして京都市民の在り方を考えるにあたっての拠り所にほかならない。これを土台として、京都市民ひとりひとりが、上記した問いはもちろん、時代に即した新たな問いをも自ら見出し、それぞれのくらしの中で考え続け実行していくことを、心から祈念したい。この過程においてこそ、京都市が日本中ひいては世界中の人々に敬愛され、人類社会の未来の一端をも担っていく、すなわち、世界文化自由都市として世界史において大きな役割を果たすという都市の理想が実現されていくはずである。

わたしたち京都市民は、このまちが保全してきた人間的遺産の享受者・継承者である。この意義と幸福を噛み締めながら、世界文化自由都市という都市の理想の実現を希求し、京都市そして京都市民の在り方を世界とともに不断に問い続けていくことをここに静かに決意して、本長期ビジョン（仮称）の結びとする。

- ・ 「心から祈念したい」について、この文章の主語は誰なのだろうか（藤野委員）

その他

	委員からの修正意見等
全体構成	・ <u>大学がたくさんある点も、違う項目として書いていただいても良いのではないか</u>（小川委員） ・ 伏見区が一切入っていない。例えば、<u>伏見区の方が読んだ時に、他の区は全て出てくるのに自分の地域がどこも出てこないのは、少し寂しいのではないか</u>と思う。日本酒も無形文化遺産になっているので、一言、お酒というのが例示か、何か情景として記載があればと思う（鈴鹿委員） ・ 第四章が今言いたいことだと思うし、第四章のところで「学藝」など様々なキーワードが出てくる。それらのキーワードは唐突に思えてしまう原因の一つが、文章の後半に出てくるからかもしれない。例えば、<u>二章と四章を最初に持ってきて、背景部分である一章、三章を最後に持っていくのはどうだろうか</u>。行政の立ち位置や背景というのは必要なことではあるが、市民にとってはどこまで必要か。大事なところが読まれずに終わってしまう可能性があり、もったいない。<u>言いたいことを最初に持ってくる</u>ことを検討いただくのも良いだろう（濱崎委員）
表現	・ 少し不安に思う言葉がたくさんあった。<u>言葉や使い方の練り上げをお願いしたい</u>（濱崎委員） ・ 重要なことが、重層的にあることによって、その奥行きやにおいのようなものが伝わる効果がある一方で、<u>少し繰り返しが多いのではないか</u>。繰り返しが良い効果を生んでいない要因の一つとして、<u>キーワードの意味が定義されていない点がある</u>（濱崎委員） ・ なにもないくらい削ぎ落としたものが幽玄の世界、能の表現という価値観も京都はある。<u>詳しく書いて読んでもらおうというのはありつつ、京都らしさは削ぎ落とした形である</u>（宗田会長）
やさしい版（概要版）	・ <u>短時間で読めて取っ付きやすいやさしい版は、どの人にとっても必要</u>ではないか。ただ子ども向けだからやさしくするということは子どもに失礼で、<u>子どもたちのほうが勉強する意欲に燃えているので、少し解説というか、絵を足すといった工夫をすれば、読んでくれるのではないか</u>と思っている（安保副会長） ・ 外国人や小中学生の方にも広く読んでもらうことを踏まえると、易しい言葉で言い換えるというより、<u>この格調高い文章とは別でその内容を説明するものを作成すると良いのでは</u>（小川委員） ・ 「LLマンガ」という障害者や移民の人たち向けの漫画がある。大人の漫画をやさしい言葉に書き換えたものではなく、リテラシーが分からない人、文脈が分からない人たちのための漫画である。あえてマスは全て同じ四角にしたり、過去に飛ぶ時には「ここから過去の話です」「ここからは宣言の話をしています」「ここは具体例です」といったことを分かるように作成する。この基本構想とは別にやさしい版をつくるときには、<u>文言の格調高さを減らすのではなく「ここは少し含蓄のある話ですよ」「ここは直接的な事例を言っていますよ」ということを分かりやすくする工夫が必要</u>（小川委員） ・ <u>様々なコミュニティに向けて、様々なバージョン</u>の説明があってもいい（杉田委員） ・ 伝達をするという観点で言うと、同年代や下の年齢の方々と話していると、行政文書は硬いからA Iを使って全て要約させるという話を聞く。25年後はA Iの活用もどんどん進んでいき、これからの子どもたちは、<u>興味を持ったら実際に読む前に、まずA Iで要約して本当に興味のある内容かを確認してから読むこともあるだろう。この本文案も一度A Iで要約してみたらどうか</u>（鈴鹿委員） ・ 難しい漢字がいくつかある。学生たちが読むことを考えると、フリガナを振るか、言葉遣いに強いこだわりがなければ、優しい言葉遣いにした方が読みやすくなる感じた。また、例えば、<u>音声版があるだけでも変わると思う</u>（田中委員） ・ 文字サイズをできるだけ大きくしてほしい。また、これは万人が見られるので、<u>本文の抜粋版のような、これ一つで内容が分かるというものがあれば</u>、なおありがたいと思う（原委員） ・ 様々な人が自分ごとの課題として考えていかなければいけない時に、<u>多くの人が読みやすいような別のバージョンを準備できれば良い</u>のではないだろうか。それによって皆が読めるものになり、<u>自分たちの課題であることを意識できる</u>。国籍に関係なく、そのように感じてもらえるのではないか（プラー委員）

ビジョンの活用方法	自分の心に引っ掛かるところはいくつかあるし、理解が難しいところもある。先ほど御指摘があった植物と環境の課題についてはよく分からないけれども、よくわからない部分を、例えば、<u>教会の神父が聖書の一節を引用して「実はこれはこういう意味ですよ」と解説するように、必要な年代の人たちに解説するような使い方、バイブルのような使い方でもあるのではないか</u>と思った（松井委員）
-----------	---